

かいたく

教会のない地域に教会を 刈り入れ場に働き人を



2024年10月4日・5日 国内宣教カンファレンス

「信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束とともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。」（ヘブル人への手紙 十一章九節）

アブラハムに約束されたものは、カナンを永遠の所有として与えるというものです（創世記十七章八節）。いわば彼のものです。それにも関わらず、彼は自分の妻を葬るために一区画の土地を買ったに過ぎませんでした。我がものらしさをもう少し出しても良いのではと思うところですが、彼は心地よい暮らしを選びませんでした。聖書はその理由を「堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたから」と記しています（ヘブル十一章一〇節）。アブラハムにとって、地上は通過点でしかありません。ですから、そこを本拠地とはせず、旅人・寄留者として天幕生活に甘んじたのです。アブラハムをはじめ、私たちを含む「信仰の人」には、みな神の都が用意されています。それを現実のものとして魅力を感じるには、聖書に描かれている神の都の建設プランを、より深く知ることが大切です。それは「神の救いのご計画」とも言い、決して変わることはないマスタープランです。もし私たちが地上の何かに執着しているものがあるならば、神のご計画を知らないか、もしくはそれに対する信頼度が足りないからでしょう。それでも信仰生活は何とかなりますが、信仰の喜び（ヘブル十一章十三節）や都を待ち望むところの忍耐（Iテサロニケ一章三節）の質は変わります。今後イエスは上質の信仰を私たちに求めて来るでしょう。花婿イエスが花嫁である私たちを迎えに来られる日が近いからです。ですから婚礼に備えるために、神のマスタープランを知りましょう。聖書にはそれが貫かれていますから聖書を開くたびそれを意識して読んでみてください。

（JBBF国内宣教委員会委員長・井口拓志）

| 按手礼の恵み

小山聖書浸礼教会 副牧師:松本 修



9月16日に教会を上げて準備してまいりました按手礼式を主の恵みによって執り行うことができ、15名の先生方に按手の祈りをさせていただき榮えに預かりました。主に深く感謝するとともに恵みを証し、主に栄光をお返しさせていただきたいと思えます。

主の恵みの1つは、三澤隆男先生と佐藤一彦先生、お二人に按手の学びをしていただいたことです。最初、三澤先生にご指導を賜りました。私は高校卒業後すぐに神学校に入学しましたが、当時の校長が三澤先生でした。私は知識も経験も足りない未熟者で、三澤校長の言葉の重みも深みもよく分からない学生でした。そんな私が現場に出て主と教会とに仕えた24年を経て、今度は一対一で三澤先生から学ぶ機会が与えられました。本当に贅沢なひとときでした。

先生は船橋教会を開拓された時の苦労や失敗などを飾らずに話してくださいました。その話しぶりはただの昔話ではなく、私がこれから伝道・牧会をしていく上で必要なことを教えようとするものでした。ご自分の経験から、聖書を忠実に語るとともに、人の言葉に耳を傾け（傾聴）、その気持ちを理解し寄り添うことの大切さを教えてくださいました。その上で、私の愚かな失敗や結婚の悩みにも傾聴し、気持ちを理解した上で私に気づきを与えてくださいました。この学びは机上の勉強ではなく実践のための学びであり、三澤先生に教えていただけて本当に幸せだと感じた瞬間でした。また、先生は今のキリスト教界の動きにも明るく、現在広まりつつある聖書解釈についての情報も教えてくださいました。ご高齢になられてもおアンテナを広げ、学び続ける姿に牧師は一生学ぶべきことを教えられました。

幸いな学びも1年弱続き、もう何回かで学びが終わろうとしている時に、三澤先生が病に倒られました。試練の中にある先生とご家族、柏の兄姉のために祈りつつ学びの再開を待ちましたが、状況が難しいということで佐藤一彦先生が学びを引き継いでくださいました。佐藤先生はエネルギーで、能先生の後を継がれ、ウガンダで宣教師として働かれた先生で、また違う学びとなりました。先生の宣教スピリットを感じ、世代交代の体験を伺い、賜物にそった伝道も垣間見させていただきました。このように世代も、活躍された働き場も、タイプも違うお二人の先生方に教えていただいたことは望外の恵みでした。

もう1つの恵みは、式において4名の先生方が神のことばを私と教会とに語ってくださったことです。小山教会を開拓し、約47年間伝道・牧会された浜田先生は、長い時間をかけて世代交代のための準備をされました。先生の時代を見る目と企画力は素晴らしく、按手礼式も今後の私の働きや教会の成長のために有益な時となるようにと準備を進めてくださいました。そして、「長老たちによる按手を受けたとき、預言によって与えられた、あなたのうちにある賜物を軽んじてはいけません」（Iテモテ四章十四節）のみことばから、按手に来てくださる先生方に神のことばを語っていただくことを発案されました。テーマは「ポストモダンの時代における〇〇」で、〇〇には伝道、教育、献身、社会との関わりが入ります。共通の基準が失われた時代にあって、いかに伝道・教育してキリストの教会を建て上げていくのか、力強く語っていただきました。よく祈りこまれたメッセージは私の心に深く刻まれました。オファーを引き受け、労してくださった先生方に感謝すると共に、すべてを導かれた主権者なる神の御名を褒め称えます。

これらの主から受けた恵みは無駄にすることなく、主の召しに応じて忠実に主と教会とに仕えていきたいと願っています。

献金振込先（郵便振込）
00140・2・654375
JBBF国内宣教委員会

かいたく 2024年12月発行 第93号 発行元:JBBF国内宣教委員会 長野県北佐久郡軽井沢町大字長倉4696-27 編集責任:井口拓志 デザイン:近田健次



2024年 国内宣教カンファレンス

今、福音にふさわしく生きる

～神の市民として～

調布聖書バプテスト教会 孫 武

今年のカンファレンスは昨年の内容を土台に、ピリピ書一章と三章から「今、福音にふさわしく生きる」神の市民として」というテーマが掲げられました。まずピリピ書一章二七節『ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい』の三つの点に注目し、その意味を確認していきます。

最初は副詞「ただ」です。文頭に置くことで「それ以外にはない唯一の」というニュアンスを動詞に与えています。この動詞には「市民として生活しなさい」という意味の命令形で、この動詞の名詞形は三章二十節で「国籍」と訳されています。当時ローマ植民都市ピリピでは「ローマ市民にふさわしく生活しなさい」と推奨されていたので、パウロはここで同じ表現を用い、どちらの市民として生きるかを意識させています。最後は「キリストの福音にふさわしく」です。「キリストの福音」は第一コリント十五章三、四節「キリストは、聖書に書いてあるとおり、私たちの罪のために死なれたこと、また、葬られたこと、また聖書に書いてあるとおりに、三日目によみがえられたこと」です。では、この福音に「ふさわしく」生きるとはどのような生き方でしょうか。同じ原語が用いられているマタイ十章三七、三八節を参考に考えてみましょう。「私より父や母を愛する者は、私にふさわしい者ではありません。私にふさわしい者ではありません。自分の十字

彼らが投獄されないために「私に倣ってはいけない」と言わなかったこと。実際、投獄は、福音宣教の前進に役立つのです。第一ペテロ二章二十一節「このためにこそ、あなたがたは召されました。キリストも、あなたがたのために苦しみを受け、その足跡に従うようにと、あなたがたに模範を残された。」信仰の試練の中で、キリストに向かう時に私たちも勝利を得ることができのです。同じ励ましを受け、キリストの足跡に従うものでありたいです。

第二の特徴：キリストを誇りとする

(十八、十九節) 「私は…今も涙ながらに言うのですが、多くの人がキリストの十字架の敵として歩んでいるからです。その人たちの最後は滅びです。彼らは欲望を神とし、恥ずべきものを栄光として地上のことだけを考える者たちです。」

かつてエルサレム教会を迫害したパウロはまさしく「キリストの十字架の敵」でした。しかし、今では、自分にとって誇りとしていた全てをキリストのゆえに損と思っていると告白しています(三章七、八節)。キリストの福音の素晴らしさを知るパウロは、それを知らずに歩んでいる人のことを思い「涙を流しながら」話していることと記しています。読み手が自然とその情景を思い浮かべるような表現が用いられています。なぜ、パウロが涙を流しているのでしょうか。その理由は彼らが「最後は滅び、欲望が神、恥ず

架を負って、私に従って来ないものは、私にふさわしい者ではありません」。イエスが教える「私にふさわしい者」とは「父や母、息子や娘、そして自分を愛するどんな愛よりもイエスを深く愛しイエス様に従う人」を指します。ここから「福音にふさわしく生きる」とは「キリストの福音を地上の何(ローマ市民権)よりも愛し、その恵みを喜んで生きる人」となります。

ピリピの兄弟は二つの市民権を持つものになりました。「小ローマ」と呼ばれたピリピで魅力的な生活や皇帝礼拝に参加してきた彼らはキリストを礼拝するものになり、様々な試練に直面してしました。そんな彼らにパウロは獄中からキリストの福音を心から愛し、神の国の市民とされた恵みの中に生き続ける人生を最



ローマ市民権は地上のもので一時的であるのに対し、天の国籍は信仰により神の子とされた瞬間に始まり永遠に続くものです。すでに大きな違いを見ることができます。

次に、ローマ市民は帝国内では皇帝の権威により守られ、ローマ法に従い皇帝に忠誠を尽くすことで社会的な生活が保証されていました。それに対し、天の市民は全世界のどこにいても主イエス様の権威により守られ、聖霊の導きと御言葉の教えにより霊的な生活が保証されました。「どんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません」(ローマ八章三九節)。二種類の市民権の違いは明らかでした。ピリピの信徒たちはこの一節に大きな励ましを受けたことでしょう。しかし、主からの励ましはそれだけではありませんでした。当時の人々は霊肉二元論的世界観に立っていましたので、彼らの期待は地上のことだけでした。しかし天の国籍を持つ者には、地上での時間よりもむしろ将来により豊かな希望があることを教えています。それはいつなのでしょう。最後の特徴について学びましょう。

第四の特徴：永遠の命を期待する

(二十後半、二十一節) 「そこから主イエス・キリストが救い主として来られるのを、私たちは待ち望んでいます。」パウロは獄中で待ち望んでいた希望をピリピの兄弟に伝えました。パウロ自身



第三の特徴：天の国籍を喜ぶ

(二十節前) 「しかし、私たちの国籍は天にあります。」パウロは「しかし」を効果的に用いて、ピリピの兄弟の国籍はピリピでもローマでもなく天にあることを強調しました。二つの市民権(国籍)を簡単に比較して見ましょう。まず、

も大切にしていこうようにとチャレンジしたのです。

今年のテーマには「今」が加えられています。御言葉は時代を越え、私たちにも同じチャレンジをしています。私たちは、キリストの福音にふさわしく生きていくのでしょうか。日本で生きていくためには日本の文化や常識も大切です。しかし、それがキリストの福音にふさわしく生きることを躊躇させることがあるとしたら、信仰生活を見つめ直す必要があると思います。

神の国の市民として生きる 四つの特徴

続いてピリピ書三章十七、二十一節から副題「神の国の市民として」生きる四つの特徴について学んでいきましょう。

第一の特徴：キリストに倣う者に倣う

(十七節) 「兄弟たち。私に倣うものとなってください。また、あなたがたと同じように私たちが手本として歩んでいる人たちに、目を留めてください。」パウロは、親しみをこめて「兄弟たち」と呼びかけ、信仰の試練にあっているのはあなたがただけではないことを気づかせようと励ましました。キリストの公生涯を模範にしたパウロ、更に彼らを模範に歩んでいた全ての兄弟に目を留め続けるように勧めました。興味深いことは

も神が上に召して下さる「ただ一つ」(三章十三節)の目標を目指して生きてきたと証しています。パウロは「キリストは、万物をご自身に従わせることとできる御力によって、私たちの卑しいからだを、ご自分の栄光に輝くからだと同じ姿に変えてくださいます。」と教えました。第一コリント十五章にも同じ約束があります。主の再臨の時、私たちのからだは、朽ちるものから朽ちないものへ、卑しいものから栄光あるものへ、弱いものから力あるものへ、血肉の体から御霊に属する体へ、死ぬものから死なないものへと変えられるのです。(第一テサロニケ四章十七節他)

私たちにも同じ約束が与えられています。世界は確実に世の終わりに向かって進んでいます。今、キリストの福音に相応しく生きていくかどうか、神の国の市民として歩んでいるかどうかを主の前に確認しましょう。このキリストの福音のために、人生を主にささげて歩みましょう。主が来られるその時まで。





カンファレンス参加者証し

ハレルヤバプテスト教会
高木 穂高

国内宣教カンファレンスの運営にご尽力頂いた先生方と、全てを守り導いてくださった主に感謝します。ここで頂いた二つの恵みを証しさせていただきます。

第一に、孫武先生によるメッセージについてです。メッセージの中で「福音は最も価値のあるものである」と語られる場面がありました。私はこれまで「福音にふさわしく生きる」ということはすなわち、節制や忍耐をすることである、というような考えを持っていました。この世において信仰を堅く守っていくには、そこに節制や忍耐が求められることも確かにあるでしょう。しかし、福音が最も価値あるものであるのなら「福音にふさわしく生きる」とは、第一義に「最も価値あるものを選び取る」生き方なのだと思えられました。私たちは死ぬときに何ひとつ持って行くことはできません(詩篇四九篇十七節)。聖書は「天に宝を蓄えなさい」と教えています(マタイ六章二十節)。福音にふさわしく生きることはまさしく天に宝を積むことだと思えます。私の心がいつでも、朽ちるものではなく、朽ちないものに向けられるよう、主に祈り求めています。

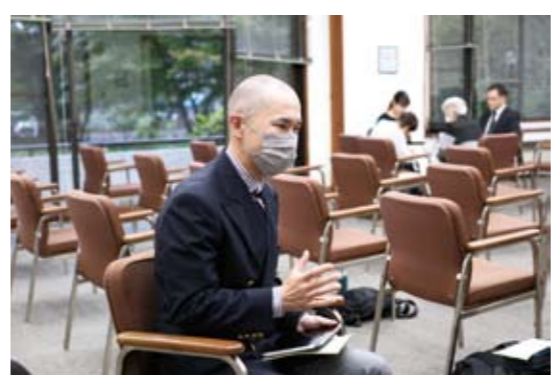
清水聖書バプテスト教会
奥村 夏葉

今年も国内宣教カンファレンスに参加する恵みに与れたことを、心から主に感謝します。今回のカンファレンスでは「今、福音にふさわしく生きる」をテーマに、ピリピ三章十七〜二十一節の御言葉を中心にメッセージをいただきました。

メッセージの中で、パウロがピリピ教会へ向けた思いを学ぶと共に、私自身は日本にいながら神の国の市民として生きていかんと問われました。私は、人の目を気にしすぎてしまいやすく、周囲の人に合わせすぎてしまい、日本人になりすぎて、状況や環境や相手によって自分を変えられるような生き方をしているところとや、いつもクリスチャンとして、ただ一つの福音を伝えるという生き方を後回しにしてしまう自分の弱さを示されました。そして、マタイ十章三七〜三八節より、イエス・キリストを愛する愛を超える愛は、主にふさわしくないことに気付かされ、自分が人生において日々何を愛し、大切にしているのかを見つめ直す機会をいただきました。

主は、パウロが涙ながらに滅びへと向かう人々のことを思い、祈り、福音を伝える姿を通して、人生にお

きたいです。
第二に、神学生の兄弟たちのお仕える姿から教えられたことについてです。この二日間、神学生たちがあらゆる場面で懸命に奉仕される姿を目にしました。夕食に私たちは学生たちが作って下さったカレーを頂きましたが、その食事の最中にも、ご自身の食事は後にして奉仕に励んでおられる彼らの献身的な姿勢に私は大いに心を打たれました。きっと神学生たちのカレーは冷めてしまっていたことでしょう。ですが、そのようにして奉仕に向かう心を主はお喜びになり、大きな祝福をお与えくださるのだと思います。私もまた、そのような姿勢で主にお仕える者に変えていただきたいと強く願います。神学生の皆様のご奉仕に感謝すると共に、その訓練と学びが大いに祝福されることをお祈りします。



いて最も重要で、最も価値のあるものは、キリストの福音を宣べ伝えることであることを示してくださいました。そして、今、地上に生きながらも神の国の国籍を持つ者として生きる歩みに生かされている、この恵みと喜びに気付かされた者として、キリストを第一として生きたパウロに倣い、ただ一つの福音に共に生きるために与えられている兄弟と励まし合い、キリストの栄光のために、ただひたすらに天を見上げて歩む者でありたいです。



豊橋ひかり聖書バプテスト教会
エルウィン・ミンケ

現在、愛知県の豊橋ひかり聖書バプテスト教会で、栗原陸牧師の下、妻のバナデットと共に奉仕しているエルウィン・ミンケ宣教師です。神様の素晴らしい恵みにより、私たちは10月4〜5日、「福音にふさわしく生きる」神の国の市民として」というテーマで行われたJBBF国内宣教カンファレンスに参加することができました。すべてを理解するのはとても難しいですが、私たちはとても楽しくメッセージを聞きました。私たちに理解と知恵を与えてくださった神様と通訳の栗原先生に感謝します。

また他の外国人宣教師たちとの交わりも素晴らしい時でした。日本語を理解することは大きな挑戦ですが私たちは皆、神の言葉そのものをよく理解することができました。それは神の恵みと奇跡によるものであり福音にふさわしい生き方をしたいという同じ心を持っているからだと言えます。

者が「私たちはみな外国人であり、私たちの国籍は天にあるから、この地上での人生の目標は福音を広め、福音にふさわしい生活を送ることで」と言われたのを覚えています。素晴らしい経験をさせてくださった牧師、宣教師の皆さんに感謝し、もしイエス様が来られるのが遅ければもっとこのような経験ができるよう祈ります。またJBBF、国内宣教委員会、おいしい料理を作ってください、準備をしてくださった方々に感謝します。皆さんの愛の労苦は主のため、ありがとうございます。私たちは皆、福音にふさわしい人生を送りましょう！



札幌聖書バプテスト教会
栢下 優

今回、秋のカンファレンスに参加して、孫師からの力強いメッセージに励まされ、主にある交わりをいただき、心から主に感謝しました。

「今、福音にふさわしく生きる」というテーマでしたが、私は「私たちの国籍は天にあり」（ピリピ三章二十節）というみ言葉は、ただ天国への希望と理解していた所がありました。しかし、地上で生きながら、神の御国の市民として生きることが、母国はすでに天にあり、イエス様にあつて生きる私は「地上に生きていながらすでに天国人である」という思いが強く与えられました。世の中で孤独や様々な不安に陥ることもありますが、救われた恵みを再認識しました。また、「福音はパッションだけではない」という言葉も印象に残りました。信仰は情熱が大切だと思っていました。ただ一時の思いだけではなく、福音に生きることは生涯にわたることであり、どんな状況の時でも一生をかけて「福音に生き続ける」大切さを改めて学びました。説教後の分かち合いの時も恵まれた先生、初めてお会いする神学生の姉妹たちと親しくお交わりさせて

頂き、それぞれの置かれた状況に悩みつつも、主に委ねながら歩まれている姉妹たちを通して、とても励まされました。神学校での夕食のカレーライスもとても美味しく、陰のご奉仕にも感謝します。宿泊先のグレイスキャンプ場では、夜でも谷井悟先生ご夫妻が笑顔で迎えてくださり温かいお風呂や美味しい朝食、花瓶に飾られた美しい花、庭の花も素晴らしい、「旅人をもてなす」（イテモテ五章十節）とはこういう事だととても温かくほっこりした気持ちになりました。土曜の夜に千歳空港に戻ると、肌寒く星が見えない夜でしたが心はポカポカと温かく、カンファレンスで学んだ通り、御国の市民として生き、イエス様が共に居てくださる道を歩み続けられるように祈りました。



野田聖書バプテテスト教会
小玉 三知代

主の御名を賛美いたします。
京都市から野田市に来て10年が経ちました。一般信徒として2年、伝道師として夫が招聘され、教会の2階に引っ越してから6年、その間、三澤隆男先生をはじめ、水野谷先生や外山先生、多くの近隣諸教会の先生方にいろいろと教えていただき、交わりをもつことができました。夫が2023年4月に野田聖書バプテテスト教会の按手札を受け、副牧師となり、2024年4月に正式に牧師に就任いたしました。この場をお借りして、お祈りいただきました兄弟姉妹に感謝申し上げます。

そして今回長野の神学校で行われました「国内宣教カンファレンス2024」にも参加させていただきました。恵みに預かりました。テーマは「今、福音にふさわしく生きる」で、聖書箇所はピリピ一章二七節からメッセンジャーは孫先生でした。先生はこの御言葉を深く掘り下げて、ローマ帝国時代のピリピ市の街の背景やその市民の考え方や生活から福音にふさわしく生きるとはどういうことなのかということ、わかりやすく、丁寧に教えてくださいました。神の国の市民として生活するとはどのよ

うなことがある、クリスチャンとしての価値観はどこにあるのかという根本的な問題が、分っているようでわかっていない、自分の信仰に目が覚められた思いでした。

特にメッセージの第二集会で第一コリント一章四〜八節の箇所から、熱心だけでは続かない。御言葉の知識による。というところは、自分の聖書知識の足りなさ、御言葉を深く掘り下げていないことに気づかされ信仰を新たにされました。わたしも還暦を過ぎ、これからどこまで聖書の御言葉を深く掘り下げていけるのかはわかりませんが、主の導きに従ってひとつひとつの御言葉を丁寧と学んでいきたいと思っています。

最後に今回のカンファレンスでは会場、交わり、食事などすべてのことに時間に余裕を持って設定されており、多くの先生と交わりを持たせていただき、同じような悩みや問題を共有し、祈り合うことができてた



いへん恵まれました。この働きにかかわり、奉仕してくだされた先生、神学生の兄弟姉妹方に感謝いたします。

滝山聖書バプテテスト教会
デボア・レナード

「あなたは自分が外国人だと感じるのはいつですか？」の問いかけで始まった孫先生のメッセージ。オランダ系カナダ人の私としては、日本で自分が外国人であると感じない日はないなあと思いつつ、日本ではいつまでたっても外国人として見られ、感じるだろうと思います。しかし、カナダにいるときは、見た目は周りと一緒にいても、気持ち的には外国人だと思えることもあるのです。それは5歳の時に来日して日本生活が長いからなのかもしれません。不思議な感覚です。さて、このように始まった孫先生のメッセージは「ただキリストの福音にふさわしく生活しなさい」（ピリピ一章二七節）のみことばをベースに、先生の特別な経験を通して、深く教えられ、大きな励ましを受けました。礼拝後、4〜5人のグループで2時間の分かち合いの企画が予定されていました。2時間も持つのかなと思いついてみるとスタートしましたが、気がついてみると足りないぐらい、様々な話題で兄弟たちと分かち合い、恵みの時となりました。その後夕食となり、神学生の方々が作ってくくださったスベシ



短時間で、改めてカンファレンスに参加させて頂き、主に感謝いたします。

ヤルカレーを、来日された宣教師たちと美味しく楽しく頂き、夜は御代田グレースキャンプ場に宿泊し、そこで谷井先生ご夫妻ともお交わりすることができました。残念ながら私は2日目のプログラムに参加は出来なかったのですが、1日目を振り返り不思議に思ったことがあります。それはいろいろな方々（神学生、宣教師牧師、様々なJBBF諸教会の兄弟姉妹など）と初対面だったにもかかわらず、このカンファレンスで私は感じるはずの「外もの」いわゆる「外国人」ということを全く感じなかったことです。これは参加していた一人一人が、同じ神の家族で同じ思いを持って福音に生かされているからだったと思います。また、孫先生がメッセージで語っておられたもう一つのみことば、ピリピ三章二十節の「私たちの国籍は天にあります」という同じ信仰で「神の国の市民として」過ごせていたからだと思えます。



イエス・キリストの恩寵の中で

ご挨拶

主キリスト・イエスの御名を賛美し感謝いたします。

三十有余年に亘り、祈りと愛と献金サポートをいただいで、名古屋聖書バプテスト教会の国内宣教師として岡山市西大寺（現瀬戸内）、岡崎、上田、高知に遣わされ、主は教会を生み出してくださり、母教会、諸教会における御用もさせてくださいました。

去る5月31日付けで国内宣教師を離任し、6月1日、改めて名古屋聖書バプテスト教会・伝道者として着任しました。これまでと異なる点は、新しい教会を始める働きはしなくなります。しかし、そのこと以外は、これまでと異なることなく、名古屋BBC、多治見CBC、岡崎BBCなどの教会での講壇御用をさせて頂いております。第三主日はフリーで、御用のない月は名古屋BBCで礼拝を守ります。これまでのご支援を感謝するとともに、天に生かされている限り、働きが支えられるよう、続けて御支援をお願いいたします。上田晃88歳・上田欣子89歳。

神学校入学が近づく間際において、主がなされた、秘めていた出来事

何十年も以前に日本バプテスト聖書神学校の某教師に、心の中に秘めていたある出来事を話しました。某教師は「今聞いた証しは、主がなされた大切なことで、JBBFの歴史なので、その出来事は文字で記録に残しておきなさい」と言われました。ここに畏れをもって、主の御業を文字で記録として残すことにいたします。主にのみ栄光が帰せられます様に。

私は、エルサレムの麗しの門で起こった出来事を見たのです。【使徒の働き3章の出来事】

主に遣わされて、比叡山の麓の村、八瀬の大原あたりを訪ねました。比叡山山頂は仏教の天台宗本山があるところです。麓の農家を何軒か訪問して、主の十字架と復活に基づく罪の赦しの福音を伝えていました。自転車で行くにはかなり厳しい、坂道のある村でした。その中の一軒の農家で一人のご主人に主がなされた出来事を証しさせて頂きました。特に主の十字架の福音、

復活の栄光を証ししたとき、夫人は真の神を知らず、不信仰の罪を犯し、偶像礼拝を続けてきたことが罪であったこと。自分を恨み、人をうらやむ罪を犯してきたことを告白されました。そして、主の福音を受け入れる告白をされました。今でも思い出しますが、十字架につけられたキリストを証ししたとき、夫人の顔が一瞬、輝いたように見えました。天の御国において大きな喜びが起きていると思ひ、私は思わず「ハレルヤ、アーメン」と心の中で主を賛美し、叫んでいました。主の御霊が顕著に働いておられることを実感していました。その後、信仰生活を送るフォローをし、主の祈りを説明し、後に続いて祈って頂きました。福音書の分冊も差し上げ、読んでいただく手ほどきもさせて頂きました。ところが

昼下がりに、家の中庭が暗くなってきたのです。突然、ピカッと光りました。雷の轟音がしたのです。すると夫人は縁側から降りて、外庭に飛び出して行かれたのです。筵（むしろ）に広げて、干してあった穀物を取り入れるためです。ところが私は目を見張りました。その方の腰がコの字に、いやこの字のように折れ曲がっているのです。それほど年を取ってはおられないのです。内庭の板張りの縁側で足を

されたように、早くそこから離れたいと思ひ、いとましようとしたとき、「おにいさん。おにいさん。一寸待ってください」と引き留められたのです。夫人は奥の部屋に背筋を伸ばして入っていき、今度は身を低くして何かを持ってこられたのです。手には千円の札束を両手の指いっぱい広げて持っておられるのです。一万円札のなかった時代でしたが、相当額の金額でした。「これまで、これ以上の御金を使ってきました」。独り言のように言いながら、「にいさん。これを受けとってほしい」と、私に渡そうとされたのです。私は、預言者エリシャの僕ゲハジを思い出しました。「この御金を受け取ったら、私の腰が変形してしまうかもしれない」。固辞しました。「私が癒されたのではありません。イエス様が癒されたのです。ただけません。イエス様に感謝してください」。「でも、何かお礼をしたい」と言われたので、重ねて言いました。「私が治したのなら、いただきますが、私が治したのではありません。主イエス・キリストがあなたの罪を赦し、病氣も癒されたのです」と証しをして、いとまをしました。後を追いかけて、どうしてもお礼をと言われたので、主を恐れながら、軒下に玉ねぎが吊るしてあったので、玉ねぎ

を数個いただいで、自転車のハンドルにぶら下げ、主を賛美しながら坂道を下っていきました。玉ねぎをぶら下げた自転車京都市内を走りました。今思うと、人の目には滑稽な自転車青年に映ったでしょうか。教会に戻りましたが、牧師夫人に玉ねぎを渡しましたが八瀬で起こったことは畏れの思いが強く、誰にも話さないで、胸の中にしまい込んでおりました。

JBBFの伝道の歴史の中で起こった主の御業であるので、かいたく誌に記録として証しさせて頂きました。今日でも主のみこころと御主権によって罪の赦しと病の癒しが行われることは信じています。ヤコブの手紙五章十五節において、「信仰の祈りは病む人を回復させます」とあります。しかし、イエス様がそうされたように、「だれにも言うな」と口止めをされ、「祭司に見せなさい」と言われたように、今天におられる大祭司キリストに、助け主である御聖霊の御業を感謝しています。ただ、主に栄光あれ。「イエスキリストは昨日も今日も、とこしえに変わることはありません。恵みによって心を強くするのは良いことです」へブル書十三章八〜九節。

神学校に入学する日が近づいてきま

下ろしておられたので、そのようなお姿の人であることには気づきませんでした。腰がコの字に曲がったままの体形で、筵を内庭に運び入れられたのです。私も手伝って、筵を運び入れました。最後の一枚を取り込むため、夫人が同じ姿勢で外に出ていかれました。雨が降り始めました。雷もゴロゴロと鳴り響いています。ところが夫人は降り出した雨に濡れながら、かなり重い筵のふちを掴んで、踊っておられるのです。「のびたあーのびたあーノビタア！」と叫んで、顔はくしゃくしゃ、雨と涙です。私は「はやく！家のなかに入って！」と叫んで、家の中庭に入って頂きました。筵の中の穀物は雨のため濡れて、筵の下側が心持ち膨らんでいます。その時、私は自分の目を疑



近隣農家の筵に広げられた穀物

した。歓送会の時、遠く農村伝道で主の救いに与られたN氏やD染物工場のH氏もお出でくださり、主の証しの時となりました。欣子姉と婚約して数週間後、京都を後にしました。後ろ髪を引かれる思いでした。これも献身の証しの一つなのでしょう。牧師先生は京都〜幕張間の夜行普通列車の切符と五百円を渡してくださいました。

『いづくまでも行かん。いづくまでも行かん。愛する主のあとを』

夜行列車で乗り継いで、翌日の昼頃総武線幕張駅に着きました。顔は列車の煙で汚れていたと思います。日本バプテスト聖書神学校へ向学心に胸躍らせて到着したのです。ところがイメージしていた神学校の校舎らしき建物が見当たらないのです。無いのです。戸惑いました。（次号に続く）



八瀬の大原近くの田園風景

いました。夫人の姿勢がすらっと伸びて、コの字型ではなくなっているのです。「ノビター！」と叫んでおられたのは腰の曲がりか直ったと言われているのです。雷の音は遠ざかり、中庭は明るくなりました。夫人は若い時にカリエスを罹患し、後遺症で腰が曲がってしまい、生活するのに不自由していたこと。あの医者、この医者に掛かってきたことなどを話されました。そう言いながら、腰を曲げたり、伸ばしたりしておられるのです。顔は喜び一杯で「イエス様ありがとうございます」と何回も何回も繰り返して、言っておられるのです。私は思わず、「主イエス・キリスト様があなたのためらしいと体の救いの両方を下さったのです」と驚きの言葉で答えておりました。私は主を恐れました。聖臨在があったからです。

雨の中で背筋を伸ばして、「のびたあーのびたあーノビター！」と、叫んで、踊っておられた夫人の姿を思い出して、麗しの門の奇跡に似ていると思ひました（使徒の働き三章参照）。主を畏れながら、主の聖名を崇め、主なる神に栄光を帰し、十字架の聖歌を歌いました。「十字架、十字架、そこに我の、罪も、ともに死せり」。感謝のお祈りをした後、私はイエス様がそう